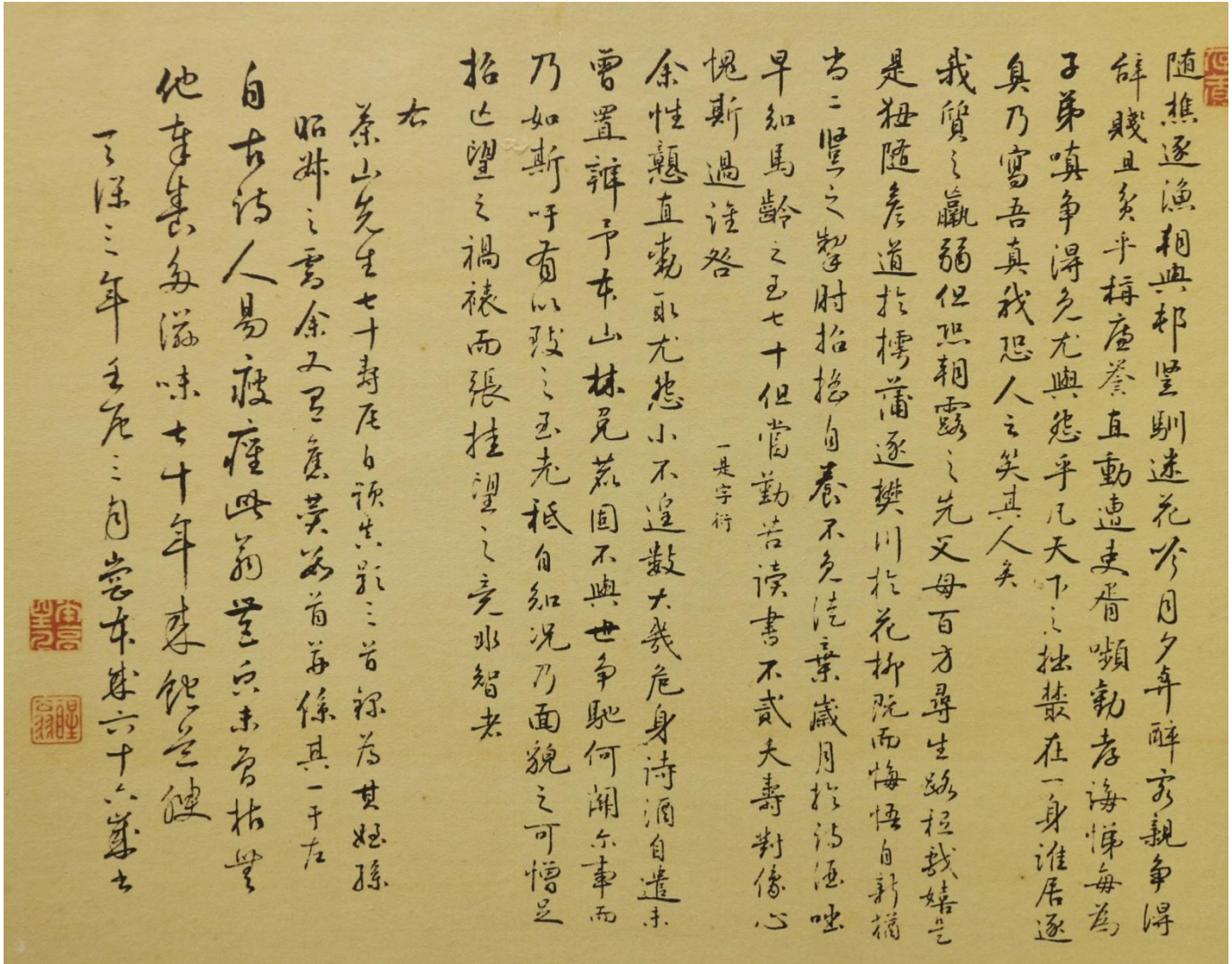


「菅茶山肖像画」岡本花亭賛 絹本着色 (複製)

この肖像画は菅茶山の七十歳の風貌が描かれる。画賛は茶山自らが人生を回顧した「自題画像」の文を岡本花亭が没後五年の天保三年（一八三二）に、姪孫の菅自牧齋の依頼に応じて書き入れている。肖像画の作者は不明である。



(部分拡大)

① 樵しょうに随したがい漁ぎよを逐おうては、朝あさに邨そんじゆ豎なと馴はなれ、花はなに迷まよい月つきを吟ぎんじて、夕ゆうに醉すい客きゃくと親したしむ。争いかでか賤せん且かつ貧ひんを辞じするを得えんや。廉れんを称あえ直ちを誉ほめては、動うごもすれば吏り胥しよの嘖あに遭あひ、孝こうを勧すすめ悌ていを誨おしえては、毎つねに子弟しよの嘖ありと為なる。争いかでか尤うらみと怨いかまぬがが免まぬるを得えんや。凡およそ天下てんかの拙せつは、叢すべて一身いつしんに在あり。誰たれか居おらんや。臭しゆうを逐おい、乃すなわち吾われが真まを写しせるは。我われは恐おそる、人ひとの其そのの人ひとを笑わらうを。

② 我われが質しつの羸るい弱じやくなる、但ただ朝ちやう露ろうの父ふ母ぼに先さきんずるを恐おそる。百ひやう方ぼうに生せい路ろを尋たずね、祇ただだ戲ぎ嬉きして是これ狃なる。彦げん道どう樗ちう蒲ぼに随したがい、樊はん川せんに花かり柳ゆうを逐おう。既すでにして悔かい悟ごし自みづから新あたらたにするも、猶なお尚なお二に豎じゆの肘ひじを撃ひく。招しょう搖ようにして自みづから養やしなうも、徒いたずらに歳さい月げつを詩し酒しゆに棄すつるも免まぬれず。咄あ、早ばいく馬ば齡れいの七しち十じゆに至いたるを知らしらば、但ただ当まさに勤きん苦くして書しよを讀よみ天てん寿じゆを貳ににせざるべきに、像ざうに對たいして心こころに愧はずるも、斯かく過あぐるを誰たれか咎とがめん。一いち是ぜ字じ衍ある

③ 余われが性しやうは戇とう直ちやくにして、動うごもずれば尤ゆう怨えんを取とる。小こは数かずうるに違いとあらず、大おほは幾ほとんど身みを危あやうくす。詩し酒しゆ自みづから遣やり、未なだ曾かつて弁べんを置おかず。予よ、本もとと山さん林りん兔と鹿かくにして、固もとより世せと争そう馳ちせず。何なんぞ爾その事ことに関かわらん。而しかに乃すなわち斯かくの如ごとき。吁あ、以これを致いたす有あり。老らうに至いたつて祇ただだ自みづから知しる。况いはんや乃すなわち面めん貌ぼうの憎にくむべきは亡ぼう望ぼうの禍わざわいを招まねくに足たるをや。袂ひようして張はり挂かけ、之これを望つめば竟ついに智ち者しやに非あらず。

右  
茶山先生七十寿辰、真影に自讚せる三首其の姪孫昭叔の需めの為に録す。余、又旧賛数首有り。并せて其の一を左に係る。  
古より詩人は瘦癯し易し。此翁の花貌、未だ曾て枯れざるは無し。  
奉養を他いて滋味多くして、七十年来是に飽きて腴ゆ。  
天保三年壬辰三月 岡本成六十六歳書す。

【出典】『黄葉夕陽村舎文』卷四所収

岡本花亭（二七六八〜一八五〇）名は成、字は子省、通称は忠次郎、号は花亭・豊洲・醒翁。江戸で生まれ、勘定奉行となり近江守に任ぜられた。文化十一年（一八一四）茶山の東遊のとき江戸で会い親しく交わっている。その後、会うことはなかったが茶山の詩集『黄葉夕陽村舎詩』の中にもそのときの交友を偲び八首が詠まれている。

二〇一九年（令和元年）八月二十四日菅茶山顕彰会学習会

（菅茶山記念館作成）